

特集 古代都市 ～日本人とまちづくりの原点～	Special Features Ancient cities The Japanese and the origins of town development	古代の巨大都市 Ancient megalopolises
<h2>吉野ヶ里遺跡に見る「弥生都市」</h2> <p>～弥生時代環壕集落の成立・発展・廃絶の歴史的意義～</p>		
高島忠平	TAKASHIMA Chuhei	佐賀女子短期大学/学長

佐賀県にある吉野ヶ里遺跡は、日本最大の弥生時代の環壕集落跡として知られている。この遺跡は、縄文時代晩期後半（紀元前4世紀）から弥生時代後期後半（紀元3世紀）の約700年間継続した集落の跡である。日本列島における水稲耕作を中心とした初期農耕社会の成立と発展に対応し、政治的地域社会「国」の信仰・政治・経済の中心である「弥生都市」集落として成立・発展・拡大し、さらに廃絶してゆく軌跡を、段階を追って見ることができる極めて稀な遺跡である。

また、この遺跡で確認された高殿・物見櫓・環壕・豊富な鉄製の武器・利器は、『魏志倭人伝』に記述された卑弥呼の都（御家拠）と符号するものとして、日本列島における古代国家の成立過程の謎を解く「邪馬台国論争」にも大きなインパクトを与えてきている。

ここでは、巨大環壕集落吉野ヶ里遺跡の弥生時代全期を通じての変移のあり方を中心に、列島各地の環壕集落の成立・発展・拡大・廃絶の過程を通して、「弥生都市」の成立と弥生時代環壕集落の歴史的役割を明らかにしたい。

1——北部九州における「国」社会の成立

紀元前1世紀（弥生時代中期前半）、北部九州各地に素焼きの大甕を用いたこの地域特有の列状の埋葬様式が発達した。それまでの墓は数軒単位で構成される小集落（小親族集団）ごとに、それぞれの墓域（埋葬の場所）が形成されていたが、この時期には集落ごとの墓が大きくまとめられ、長大な列状配列の墓と墓域を形成するようになった。中には列状の墓が600m以上になる場合もある。列状墓という形態のもとに墓域が、それぞれの小集落から切り離されて一定の場所にまとめられる。この列状の埋葬は弥生時代中期前半の北部九州の墓に見られる顕著な一斉の現象であって、紀元前2～1世紀に

は、社会的・政治的な規制・統制あるいは社会組織の新たな強化の動きがあったことをうかがわせている。

同時に、一般成員の埋葬とは際立った違いを見せる特別の墓域や大型の墳丘墓が築造される。吉武高木遺跡、三雲南小路遺跡、須玖岡本遺跡（以上福岡県）、柚比本村遺跡、吉野ヶ里遺跡北墳丘墓（以上佐賀県）が代表例である。

吉野ヶ里遺跡の墳丘墓には、紀元前1世紀前半から後半にかけての甕棺が14基以上埋葬されていた。そのうち8基に銅剣が副葬されていた。14の被葬者はいずれも成人で、この墳丘墓に埋葬された人物が、首長や祭事者などの特定の上位身分に限られた階層であったことを示している。しかも、環壕内北端に墳丘墓が位置する吉野ヶ里遺跡では、墳丘の墓前に濠の外からも墓道が設けられ、広域な地域から参集した大規模な墳墓祭祀が行われていたことが窺える。しかも、こうした特定の墓域には、立柱・拝殿・祭殿などの儀礼施設を充実させながら、永年に亘る継続的な墳墓（祖霊）祭祀が行なわれている。この埋葬における顕著な差異は、弥生人の社会が大きく2つの階層に分化していることの表れである。また、一般成員の列埋葬にも、北墳丘墓に近接したり離れて列状に大群集して営まれたりしていた。その中でも小墳丘を持つグループや、貝製腕輪や絹製衣服を身につけた人などがおり、一般成員の間にも身分や階層が存在することが認識できる。

紀元前1世紀には、北部九州弥生社会では既に多様な身分や階層があり、それらの人々によって構成される社会組織が形成されていた。このことは、氏族が政治的に結合して首長・祭事者といった特定の身分によって代表・統括・指導される政治的地域社会「国」が成立したことを物語っている。



■図1—「前漢書」地理志・「後漢書」に現れる北九州の「クニグニ」（鳥栖銅鐙と2000年前の西日本より）

ここで重要なのは、銅剣などの副葬は、被葬者の生前の地位（身分）が、戦闘の指導者や政事・祭事の指導者、つまり首長層であったことを示すと同時に、死後もなお、その身分を保持すると考えられていたことである。被葬者は、その副葬品が表す地位を保持したまま墳丘墓に埋葬され、祖霊となって、その社会を導くことを意味していたのである。これはまた、特定の身分や血統に連なる祖霊信仰が、支配的な信仰として成立したことをも物語っている。吉野ヶ里墳丘墓前の大規模な祭事と、以後、墓前祭事の200年以上に亘る継続は、祖霊の託宣・神託によって、社会が導かれるといった当時の支配的な思想と社会的行動理念とを具体的に現しているものといえよう。武器は首長の身分や権威の表象として所持され、また集団的祭祀の祭器であることは、武力の行使が社会の指導者である首長の主要な職能のひとつであったと考えられる。

吉野ヶ里遺跡の紀元前2世紀後半から1世紀前半の時期、列埋葬中に見られる首を欠いたり、刀傷があったり、腹部に矢を打ち込まれたりした埋葬者や、同時期の北部九州各地の埋葬に見られる多くの戦闘を想起する資料は、紀元前1世紀の前半に、政治的地域社会「国」が成立する過程で、部族を構成する氏族間あるいは部族相互間で戦闘があったことを示している。紀元前2世紀後半から紀元前1世紀前半にかけての武力の行使は、首長制による政治的地域社会「国」の成立・確立の覇権をめぐるものであった。

弥生時代の環壕集落は、こうした弥生時代の社会的動向と深く係わりながら、機能・規模を拡充していった。

2——環壕集落と「弥生都市」の成立および戦い

弥生時代の環壕は、濠単独あるいは土塁・柵を併設して防衛機能を担う施設である。その分布は、日本の東北・北海道と沖縄を除く地域に分布している。大小を合わせれば500箇所ほどである。その中で、極めて大規模で、地域的に拠点性を持つものがある。福岡県比恵那珂遺跡、三雲遺跡群、平塚川添遺跡、佐賀県吉野ヶ里遺跡、惣座遺跡、長崎県原の辻遺跡など北部九州に見られる大規模な環壕集落は、紀元前1世紀に成立する「国」の宗教・政治拠点が、さらに経済拠点となる都市集落を戦略的に防衛する総構えとなっている。

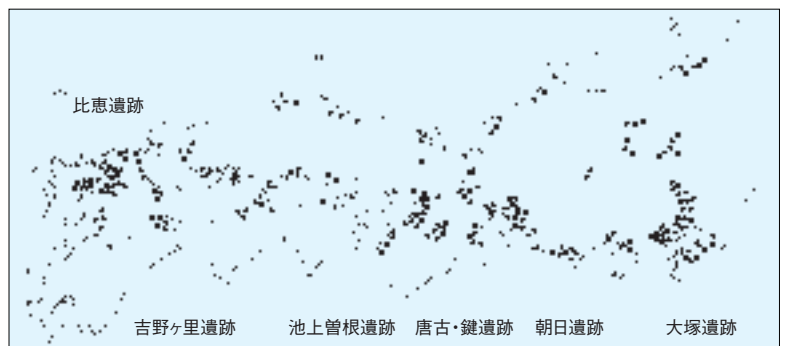
この大規模環壕は、紀元前5～3世紀（縄文時代晩期～弥生時代前期前半）に北部九州の一部に見られる環壕とは、戦闘を意識した施設としては共通の目的を持つが、「国」成立以前と以降（弥生時代中期初頭～紀元前1世紀前半）とは、社会的・政治的背景に明らかな違いがある。

弥生時代の戦いには、社会の進展と共にいくつかの段階があり、環壕集落はこれらに対応して拡充・整備されていったことが認められる。第1段階農業開始期（紀元前5～3世紀）、第2段階の「国」成立期（紀元前2～1世紀）、第3段階「国」相互期（紀元前1～紀元3世紀）の3段階である。

第3段階目の後半は、「国・国」が共に王を立てて連合を結成し、他の連合と勢力を争うステージが『魏志倭人伝』から窺える。そうすると弥生時代の戦いには、それぞれに社会的・政治的背景が異なった4つの段階があることになる。また、各々の段階において武器の質も異なっている。第1段階は石製品が主流、第2段階は石製品と金属製品（青銅器）、第3段階は石製品と金属製品（青銅と鉄製品）、第4段階は金属製品（鉄製品）が主流である。

1) 第1段階

第1段階は、既存の武器を用いて、稲作のため、特定の土地の継続的利用といった新しい「彼ら（渡来人）」集団の主張する権益と、従来の自然資源に依存度が大き



■図2—日本列島における弥生時代環壕集落の分布の概観（約500カ所ある）



■図3—吉野ヶ里遺跡の墳丘墓と北内郭復原図

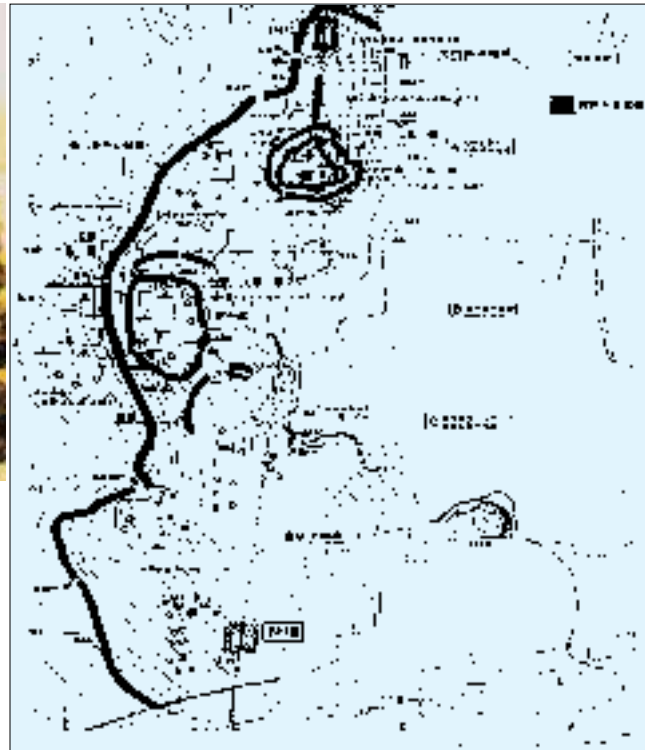
い旧い「我々（縄文人）」集団が守ろうとする権益とが衝突する戦いであって、前代の縄文時代より進んだ戦闘技術および組織的戦いと考へたい。この頃の環濠集落は、新しい「彼ら」集団のコロニーの拠点であった。「彼ら」集団は、次第に分村集団・後入り集団を輩下に置きながら、新たな階層社会の要請に応じた首長居館、身分を示す青銅器の製作工房などを取り込んだ環濠集落を形成した。吉野ヶ里遺跡の初期の環濠集落は2～3ha、紀元前3～2世紀には場所を北に移動して約3haの環濠集落となり、環濠内から初期の青銅器製作器具が出土する。

2) 第2段階

第2段階では、吉野ヶ里のように、弥生時代中期初め（紀元前2世紀後半）、約20haといった大規模な環濠集落の形成が始まる。戦いは「国」の成立のイニシアティブを賭けた組織的戦いであり、複数の「彼ら」や「我々」氏族の政治的結合による部族社会が、領域を確定し「国」を確立した。

剣が武器の主流として登場するのは、文化人類学者・民族学者であった故大林太良氏^{おおばやたりょう}が指摘するように、所有者の軍事的能力とその職能とに結び付く段階である。戦闘では白兵戦が始まり、恒常的な相次ぐ戦闘の指導者が次第に社会の指導者として成長し、首長としての身分を確立していった。そして「建国」の始祖としての首長の墓や、そのための祭場と神々が依りつく祭壇が設けられる。

吉野ヶ里遺跡の首長の墓域である北墳丘墓と南の祭壇とは約800m離れていて、ほぼ南北の線上に並び、さらに南約70kmの延長線上には長崎県の雲仙普賢岳が位置する。つまりこの時代の「国」の拠点集落を築くにあたっては、広大な空間意識があったことが判る。柚比本村遺跡にも、阿蘇山を見通した墳墓と祭祀遺構の配置



■図4—吉野ヶ里環濠集落遺構配置概略

例がある。中国で前漢前期から徐々に整えられつつあった四神（青龍、朱雀、白虎、玄武）による空間認識と信仰が、北部九州の「国」の拠点集落形成に影響を与えていたのではないかと考へている。弥生人は、火の山を朱雀と見立てていたのかもしれない。その後に見られる漢文化への傾倒はこのことを示している。

こうした「国々」は、東アジアの宗主国「漢」^{らん}に楽浪郡（紀元前108年から紀元後313年まで朝鮮半島北部に存在した中国王朝の郡県）を通じて朝貢し、国と王の称号を得ようとしたと見られる。この間の事情は、『漢書』地理志「楽浪の海中に倭人有り。分かれて百余国を為す。歳時を以て来り献見すと云う」に見える。この時期以降、北部九州の墳墓の副葬品などの文物が、朝鮮半島系から中国系に変化していった。

これは、北部九州を主体とした地域的政治社会（部族）が、「漢」帝国による「国」としての認証を求めた政治的行為を示すと同時に、弥生時代後期の本格的な鉄器文化を促す大きな契機ともなった。「国」の中核となる集落が、特定の祖先の墳墓などの祖霊祭祀の儀礼秩序のもとに営まれるようになる。平塚川添遺跡、原の辻遺跡、吉野ヶ里遺跡のような大規模集落における群集する穴倉・高床の倉の存在は、既に租の収取が本格的に始まっていたことを示している。

3) 第3段階

第3段階は、吉野ヶ里遺跡の環濠集落が45ha以上に

巨大化した時期である。この時、北墳丘墓と南祭壇に律せられた祭殿等を備えた北内郭が設けられ、聖的な宗廟^{そうびょう}として整備される。また、その南方に首長層の居宅で構成された南内郭が設けられ、政治拠点も整備される。さらに、南内郭西方には、環濠に囲まれた高床倉庫群と楼および広場がある区域が新たに付設され、租の収取・保管備蓄・交易・集会などの機能を持った「倉と市」として、『魏志倭人伝』に記す「租賦を収む、邸閣有り、国々に市有り、有無を交易す、大倭をして監せしむ・・・」を体現する大規模環濠集落に拡大発展した。

この時期、北部九州では、吉野ヶ里遺跡同様、比恵那珂遺跡群、平塚川添遺跡など拠点環濠集落が大規模に拡充し、それぞれ「国」の戦略的総構えとして強化整備された。宗廟、祭殿、首長層の居宅および一般成員の住居区、各種の工房・群倉などを備えた「国」の戦略拠点として、さらに「倭人伝の市」といった新たに公の市を設けた「弥生都市」が姿を現すのである。

この時期の戦いは、「国」の領土防衛、「国」と「国」との連合といった戦略的戦いである。後漢書に見える「倭奴国王」の朝貢（紀元57年）、倭国王師升の朝貢（紀元107年）や「桓、霊の間、倭国大乱、相攻伐・・・」は、第3～4段階での北部九州における倭の政治連合の覇権をめぐる抗争があったことを裏付けている。各「国」の拠点はこれらの機能を整備した大規模集落、つまり「弥生都市」として拡充していった。そして武器を祭器化し、武器形の祭器を用いた戦神・軍事的祭儀が、祖霊信仰と合わせて社会結合の重要な構成要素となっていく。

4) 第4段階

第4段階は、交易の発達や「国」の連合など、地域間交流の拡大とともに、資源獲得・対外交渉などの権益の確保、領土の保全を共通の利害としたより広域な「国」連合化への戦いの時期である。また一方では、同様の他の連合とのより広い領域の政治的覇権の成立をかけた戦いではなかったか。

弥生都市としての装いを持つ中核的大規模環濠集落は、市を備えるなど、施設・設備を拡充し集落として頂点に達するが、3世紀後半から4世紀にかけて、政治的には一国よりも広域な政治的秩序が重要性を持つようになる。そのための新たな機能を備えた拠点が形成される中、歴史的使命（「国」の成立と連合化）を終え、徐々にあるいは急速に廃絶して行ったと考えられる。

3——弥生都市プロローグ

やがて新たに拡大していく政治秩序のもと、巨大環濠



■写真1—復元された弥生都市（吉野ヶ里）

集落に集約されていた「国」の宗教的・政治的・経済的諸機能は解体し、4～5世紀の新たな政治機構、ツクシ、キビ、ヤマト、イヅモなどといった地域的豪族連合政権の形成と、その構成単位である地域豪族の政権を担う機構として再編されるのではないかと考へている。また、5～6世紀には、これらの地域豪族連合政権相互の抗争で、最終的にヤマトが統一国家形成の覇権を掌握し、7世紀後半には、律令国家といった古代国家を確立したとの見通しを持っている。

弥生時代の戦いと環濠集落の出現と拡大・拡充を通しての集落の大規模化は、日本列島が水稻農耕社会成立以降、地域的政治的社会（国）を生成し、急速に古代国家形成へと向かう弥生社会の歴史的な性格と特質を象徴的に物語るものである。

吉野ヶ里遺跡に見られるように、紀元前3世紀から紀元後3世紀、約600～700年間における「彼ら」集団の集落が、稲作農耕の成立と発展を基盤に、徐々に国の中核的集落として、首長墓を含む宗廟、租収の倉、公設の市、宮廼、港津などの施設を充実させていった。そして、規模・機能を拡大・充実して成立したものが、卑弥呼の都（御家埴）といったところであろう。弥生時代環濠集落の拡充と機をひとつにしたと見られる地域的政治社会「国」は、後世の「郡」として律令国家の基礎単位につながって行くものでもある。

<参考文献>

- 岡崎敬他「立岩遺跡」立岩遺跡調査委員会 1977年
- 七田忠昭他「吉野ヶ里遺跡」佐賀県教育委員会文化財調査報告書113集 1992年
- 高島忠平他「国営吉野ヶ里歴史公園南内郭西方倉庫群建物等基本設計報告書」国土交通省 2001年
- 橋口達也「弥生時代の戦い 武器の折損・研ぎ直し」『九州歴史資料館研究論集』17 1992年
- 橋口達也「弥生時代の戦い」『考古学研究』第42巻第1号 1995年
- 高島忠平「佐賀と邪馬台国」『ふるさと・人と風土』佐賀テレビ 1983年
- 安藤宏道他「弥生のいくさと環濠集落」横浜市歴史博物館 1995年
- 門脇禎二「地域王国とヤマト王国」学生社 2000年
- 田中清美「近畿やよい社会の墳墓」『早良王墓とその時代』福岡市歴史資料館 1986年
- 林巳奈夫「漢代の神々」臨川書店 1989年